

あけのほし 2013年11月

「まことの先に照らされて」

菊田行住

「野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。」

(ルカによる福音書12章26-27節)

子どもの頃、よその家の子に生まれたら良かったのにと、よく思ったものです。友達が新しい玩具を持っていたらそう思ったし、どこか外国に旅行に行ったのだと聞いたら、その家の子だったら良かったと、うらやましく思っていました。それが、思春期を迎える頃には、人並み以上の容姿だったら、女の子にもてたのにと、そのことが一番の関心事になっていました。

そういった意味では、世の中には多くの人がうらやむものと、いつも日陰にいるものというの、やはりいるわけです。親の保護下から出て行く頃になると、そのことはよりはっきりと現れて行き、人々による優劣を分けるまなざしに、誰もがさらされて行くことになります。自分が他の人の目から評価される存在の方になりたいと思うのは、誰もが一度は経験することなのだと考えられます。

宮沢賢治の作品の中に、『めくらぶどうと虹』という童話があります。その中でめくらぶどう（野ブドウ）は、自分の存在が意味無く思えて絶望しています。他と比べて鮮やかに栄える色彩を放っていることにかく、自分の姿の醜さを心底嫌っていました。そこに、雨が上がった後の空に、それは見事な虹が現れました。めくらぶどうはその虹の美しさに目を奪われ、自分も虹になりたいと、必死に虹に頼み込みます。しかし、虹は私はすぐに消えてしまうもの、そしてあなたにはあなたの美しさがあるのだと説得をしました。それでもめくらぶどうあきらめず、あなたは高く光のそらにかかっている、すべての草や花や鳥は、あなたをほめて歌っていますと、食い下がりました。すると虹は、こう答えます。

「それは、あなたも同じことです。すべて私に来て、私をかがやかすものは、あなたをもきらめかします。私に与えられたすべてのほめ言葉は、そのままあなたに贈られます。ごらん下さい。まことの瞳でものを見る人は、人の王の栄えの極みをも、野の百合の一つに比べようとはしませんでした。それは、人の栄えをば、人のたくらむように、しばらくまことのちから、かぎりないのちから離して見たのです。」

虹は、雨上がりに空気中の水滴に光がさしてこそ存在します。ですから光なくしては自分が存在しないのだということを痛いほど自覚しているのです。さらに、目に見える現象としては、虹ほどはかないものはないからこそ、虹には目に見えないまことの光のなかで

の永遠性を強く信じているのです。虹は、その自分を存在させ、そして永遠の世界に繋げてくれるまことの光が、このめくらぶどうにも同様に照らされていることに、目を向かわせませす。目に見える現象だけでは捉えられない、存在していること自体の美しさにです。まことの瞳でそのことを見た時、めくらぶどうにも同じ光が注がれていて、性質は違っていても、草々花や鳥がほめ歌ういのちの輝きが見えてくるのです。

そして、まことの瞳でものごとを見る時、人がこうしたらもっときれいだろうとか、もっと人から尊敬されるにはどうしたらよいだろうという計りごとから解放されるのだというのです。賢治は、これを聖書のイエスの言葉を引用することで表しました。ソロモンというのはイスラエルの昔の王様で、知恵に長け、国の領土もイスラエル史上最大で、最も栄華を極めた存在でした。イエスの時代もソロモン時代の栄華というのは人々の理想であり、その栄華を再び取り戻したいというのが人々の希望なのでした。賢治はイエスをまことの瞳でものを見る人としてここに登場させ、そのソロモンの栄華と一輪の野の百合をくらべる無意味さを語らせました。もっと美しくなりたい、もっと天から尊敬されたいというような人の思いのままに、野に咲く一輪の花を見たところで、そのいのちの輝きは決して見えないのだ。いま、自分を照らしているまことの光に思いをめぐらさない限り、どのように人から評価される何かしらを手に入れても、決して満足することはないだろうというイエスの視点を、賢治は引用したのです。

ただ、このことは、ソロモンの栄華を、すべて否定しようというわけではありません。素朴な一輪の野の花こそ最も美しく、人の計らいによって作ったものはすべて悪だという価値の逆転ではないのです。虹はめくらぶどうにも、まことの光が注がれていること、そしてまことの瞳で見る大切さを述べた後に、こう付け加えます。

「もしそのひかりの中でならば、人のおごりからあやしい雲と湧きのぼる、塵の中のただ一抹も神の子のほめ給うた、聖なる百合に劣るものではありません。」

虹は、まことの光が世の中で劣っていると思われるものにもちゃんと注がれていることを、まことの瞳によって見ることでさえできれば、人の計らいによるソロモンの栄華にさえ、まことの光が照らしていることを見ることのできるのだといいます。人の計らいの中には、美しさを求める余り、醜いものを傷つけてしまうというような「罪」が存在しています。しかし賢治は、そのような人の抱える悲しみの姿にさえ、まことの光の中にあるのだというのです。「罪」や苦しみ、人の痛みさえ、まことの光はそれらを永遠の世界から照らしています。まことの瞳でそれらを見る時、私たちはそのどれ一つをとっても、無駄なことはなかったのだと知ることができるのです。

この賢治のイエスの言葉の解釈は、本当に当たっているのだと、私には思えます。永遠から照らされるまことの光は、私たちの良いところも、醜いところも、すべてを照らしてくれているのだということ、これがイエスがもたらした良い知らせ（福音）の大切なところだからです。

